



2013年10月9日放送

頻用処方解説 防風通聖散①

日本医科大学付属病院 東洋医学科 高久 俊

1. 主な効能

防風通聖散の主な効能です。防風通聖散は、腹部に脂肪が多く便秘がちなものの次の諸症、すなわち高血圧症の随伴症状（動悸、肩こり、のぼせ）、肥満症、むくみ、便秘に対して用いられる処方です。近年では、便秘や肥満の改善を目的とした「やせ薬」「ダイエットの薬」として流通しており、保険用や OTC も含めて様々な製薬メーカーから販売されています。

2. 処方名の由来・出典

防風通聖散という名は、主薬である防風に因んで名づけられました。また「通聖」とは聖人（優れた人）という意味があり防風が主薬の優れた薬という意味も込められています。本処方の出典は、12世紀の金元四大家の一人である劉完素（1120? -1200?）が著した『宣明論』の中風門です。劉完素は、疫病など数多くの熱病をみて風寒暑湿燥火のうち火を重視し火熱学説を説き、寒涼剤を多用したことから「寒涼派」と呼ばれた人物です。

その中風門には「中風、一切の風熱、大便閉結し、小便赤渋、顔面に瘡を生じ、眼目赤痛し、或は熱は風を生じ、舌強ばり、口噤し、或は鼻に紫赤の風刺癩疹を生じ、しかして肺風となり、或は癘風となり、或は腸風あつて痔瘻となり、あるいは陽鬱して諸熱となり、譫妄驚狂する等の症を治す」と記載されています。

ここで中風とは熱病のことを示します。また大便閉結は便秘を意味しますが、これは承氣湯類を用いるべき中焦の実熱の存在を示唆します。また小便赤渋は尿が赤く出しぶる様

を表して下焦の熱盛を、そして顔面の瘡および眼目赤痛、すなわち眼が赤くなって痛むのは上焦の熱の存在を示唆します。口噤は歯を食いしばって口が開かない状態のことであり、舌強ばりとあわせて熱によって風、すなわち筋肉の痙攣が生じたことを示しています。譫妄および驚狂の症も諸熱によって生じたものと捉えることができます。風刺癩疹は酒皸鼻の発疹を、肺風は気管支喘息様疾患を、また癩風は癩病およびその類似症を、また腸風は痔疾患を表すと考えられ、皮膚および肺における熱性の病変の存在を示唆します。

以上から防風通聖散は体表に侵入した風熱の邪気を疏散すると同時に、体内に蘊結している上中下焦の熱邪を除去する表裏双解の処方と解釈することができます。

3. 生薬構成の漢方的解説

防風通聖散は麻黄、防風、大黄、芒硝、荊芥、薄荷、滑石、山梔子、石膏、桔梗、連翹、黄芩、川芎、当帰、白芍薬、白朮（蒼朮）、甘草、生姜の 18 味より構成され、その効能も多岐にわたります。しかし大別すると体表の風邪を解除する部分と、体内の熱を瀉下する部分とに分けられ、特に裏熱を瀉下する力が強いため、方剤全体の薬性は寒涼であると考えられます。

防風、荊芥、麻黄の 3 薬は辛温解表薬であり祛風作用によって体表の風邪を追い払います。薄荷は辛涼解表薬に属しており防風、荊芥、麻黄の温性を抑えるとともに疏風にも働きます。これら 4 薬によって表邪を発散します。これに宣肺止咳、化痰利咽の効能を持つ桔梗を配合して発疹症状の初期、肺気不宣による咳嗽、気急、咽喉不利などの症状を治療します。亢進した肺熱に対して大量の清熱薬、石膏、黄芩、連翹、山梔子を使用して対応しています。石膏には生津作用もあり口渴を止めるのに役立ちます。また黄芩と連翹は解毒作用を兼ね備えているので皮膚の瘡瘍腫毒を治療します。大黄と芒硝は瀉下剤で通便によって体内の熱毒を除去します。滑石と山梔子は清熱滲湿薬であり前者は利湿作用が、後者は清熱作用が強く、これら 2 味の配合によって体内の熱邪を尿から体外へ排出するのに役立ちます。

このように本処方では、大量の祛邪薬が使用されているので体内の正気を損傷する恐れがありますが、それを防ぐために扶正薬も配合されています。当帰、白芍薬、川芎は養血活血薬で血分を保護します。血を潤（滋）養することで、風邪をおちつかせ、搔痒症状を鎮めるのに役立ちます。更にその活血作用は頭部顔面などの癰や癤といった皮膚の化膿性疾患を根治に導くと考えられます。白朮と甘草は益気健脾薬で多量の苦寒薬使用から脾胃を保護するのに役立ちます。生姜も胃を調和することができます。

以上まとめると、本処方では、清熱瀉火、瀉下、祛風、利水薬を組み合わせ、消炎解熱に働くとともに、利胆、利尿、発汗という解毒排泄経路すべてを利用して熱邪の体外への排泄を促そうとするものであり、炎症に対して理想的な方剤であるといえます。更に補気補血薬を配合し、攻撃の行き過ぎを抑制する配慮もなされ「発汗して表を傷らず、攻下して

裏を傷らず」といわれ、長期使用しても比較的安全性が高い処方であるといえます。

4. 古医書における記載（江戸～明治・大正期）

室町から安土桃山時代に活躍した後世方の大家である曲直瀬道三(1507-1594)はその著書である『衆方規矩』の中で、「風熱に因って癬または瘡を生じ疥を出して治りにくいものを治す」また「禿頭瘡（しらくも）には本方の末を酒に浸して焙り乾かし食後に3回、白湯を服すると、頭汗を発するようになって効果が現れる」と述べ、掻痒性湿疹や白癬など皮膚疾患への適応について言及しています。

江戸時代初期から中期にかけて活躍した北尾春圃(1659?-1741?)は『当壯庵家方口解』の中で、「麻疹で熱が甚だしければ防風通聖散を用いる」と述べ、当時「痘瘡は見目定め麻疹は命定め」として高い致死率で恐れられていた麻疹に対して適応があることを記しています。また「痛風で甚だしいものは防風通聖散を用いる」とあり、リウマチや関節炎など関節痛を伴う疾病への応用について、さらに「狂気の症には静まるまで本方を用いると効がある」と精神疾患への適応についても言及しております。

同時期に活躍した香月牛山(1656-1740)は『牛山活套』の中で、「三焦の実熱で淋病となったものは防風通聖散を用いると効がある」と述べ、排尿異常のある泌尿器科系の疾病に適応があることを記しています。また便毒や下疳、すなわち主に梅毒が原因で生じたと思われる鼠径リンパ節腫脹や男女の陰部に発する梅毒疹への適応についても言及しています。

また福井楓亭(1725-1792)は『方読弁解』の中で、「頭面に瘡を生じ熱があつて大便が秘するものには防風通聖散を酒製にして用いるとよい」と述べ、さらに北山友松子(?-1701)は『医方口訣集』の頭書で、壮年の婦人の顔面の粉刺、すなわち痤瘡に対して、防風通聖散を酒製にして与えてはじめて効果が現れた例を紹介しており、酒製によりその効能が増強される可能性について言及しています。

江戸中期から後期にかけて活躍した目黒道琢(1737-1809)は『餐英館療治雑話』の中で咽喉腫痛の証での適応について述べていますが、そこで虚実を明白にする重要性について言及し、実熱に属する場合は本方が有効であると記しています。浅井貞庵(1770-1829)は『方彙口訣』の中で、「本方は大頭瘟で顔や顎の大きく腫れるものに用いる」と述べています。大頭瘟は頭部の丹毒やムンプスを表すものと考えられ、このような疾患に防風通聖散が用いられていたことを窺い知ることができます。同様の記載は花岡青洲(1760-1835)の著した『瘍科方笈』や、本間棗軒(1804-1872)の著した『瘍科秘録』にも認められます。

江戸後期に活躍した百々漢陰(1773-1839)は『梧竹楼方函口訣』の中で、「防風通聖散は、もともと火気に勝った人の中風で、火勢が至って剛盛のものに用いる。とにかく風熱を目標とする方である」また「三焦の風熱を癒すのを標的とする」と述べ、本処方が風熱に対する治療薬であることを強調しています。

ユニークなところでは有持桂里（1758-1835）の著した『校正方輿輓』に、漆まけに対して防風通聖散を常用するとの記載があります。

以上まとめると、防風通聖散は丹毒や麻疹などの急性熱性感染症や梅毒などの性感染症、および顔面や頭部などの瘡や癰といった化膿性皮膚疾患や白癬などの治療に使われていたものと思われます。また精神疾患に似た病態へも応用されていたことが推察されます。